已北兩岭千
勾注上
へ5
1872
1

へ5
1872
1

世

第一

世

俺ぬまは
松を
はいなん
うた
うぐひすを
芦間
い流
みぬ里の
ほとゝぎす
作ふ
作ふ
いつくにか
雪おもたる
雁とともに
あゝ
と付
鶯
鳴まくさ
梅
金屋の
吹入
梅

解官休[ニ]老[ヒ]北遠
草堂[ニ][ヘ]栖宿[ス]成[シ]為[メニ]執[ル]卷[ヲ]展[ル]昏[ヲ]晨[ニ]
杜[ニ]鵑[ヲ]聞[ケハ]変[ス]二[ニ]郷[ニ]愁[ヲ]前[ノ]陌暗[ク]
野[ノ]小[ノ]野[ノ]の神となりぬる巳
聖廟の[ノ]祠[ニ][ヘ]参[ル]来[ル]天神[ヲ]
[ヘ]

生ひ松[ノ]松[ハ]みどり[ニ]陰ふかく[シ]て[ニ]
一[ノ]木[ノ]松[ノ]とこそ[ハ]詠[メ]し事[ヲ]誰[カ]か[ハ]知[ル]
て神[ノ]前[ノ]白[キ]木[ノ]松[ノ]生[ヒ]立[ル]
[ヘ]

生ひ松[ノ]松[ハ]をせ[ニ]ふのこさぬ[ハ]
[ヘ]

[ヘ]

拙[キ]松[ノ][ヘ]
月[ノ][ヘ]
玄[ノ]蕃[ノ]栄[ヘ]
とゝろ[ニ]
松[ノ]
君[ハ]
我[ヲ]
志[ノ]
[ヘ]
[ヘ]
[ヘ

立ならぶ木ずえもうつろいわびぬる冬
やしろのふるき
神すさび秋の色をみるもさびしき
梢の色もみぢ葉の袖よりこぼれ
落つくしてさびしき神の
人々秋の暮寺の庭
散もらす紅葉ばに昔を
思ひ出るこころ
色まさりする神垣のそこもと
くれなゐ
あひそめてやうやうきけい回
之祝の扇
る神世
野辺の末すすめ宮治紀

宇治の里小八宝を奉納の
ことし冷泉をさし
置給ふ事あり
ける
りん冷泉院よ
完
我庵や淳もこゝに須回
は長閑とう庵の
ふる
あさはふ
おもひ
とふ

めつ三ウ
ウ
夏ときゝしより初ぬ
ちゝゝし妻こひおくゝまの
つゝをりとも清か池を枕
夢よりもりの
木うもあまれ雲の花そも
つゝとりのそ
ゝおうめやすひゝ波や志ゝ
をりくゝ
志ゝやむ
ゝ
と花をゝこ
ゝり

三オ
生仏園と
とけとをも
みく首よ
きゝゝ
あ者の
あゝゝ
ゝゝあ
注場の
ゝも
なゝ
大樹榮那羅
弾瑠琴
樂大樹榮那羅

の色をふかめ而白く物の時る
ころおかしとはいふ事のおそ
ありすもゝのつまくに内
又注

第四

すゝしさ比なむふるまゆみ亀
逕源ちよとしてあり唐李
輔國歌うた夏の日しもよ
をけい涼うすゝ南湯
雑俎あり梅暑に投草
を称ひねつく多白多加
おひく古事にたよつ一の

ふりあふぐ月のさ絵
物篇のか面のなをけ家を
かゝ面のごとくに
こすの国九紗よむ人多
ことも

山ぶきのこゝろ
くゝろ
映たくたる秋のそゝ比
吹したるまくなり

木ぶ葉のふるあい小萬同
秋風のごとくまぶ
葉もこゝ夜たくたる
あくそくなるこゝろ
くゝろあり梅ちの

まつ紀いほよるしこのお同
おとろへまなるも秩ゐきに
奥こんやをこうしとこ
夜の衣ーうくまも月のこも
ひ苗衣服衣しまなと
まそしをりゐる衣こ（衣）を貞ニツ人めな
たおくこ須夜のく衣ましはさ
へようくをいやもあ
なれ人をふくふあまりく世種同
ひ付やーい服衣に衣なーこ
つをうさくのをおをふくよ
あまりに涂服をもせそそ
のまく世をおくうる（う）分のを
てなと一迫ぬをめへき

ホ良筆宗貞源右門
の扇巾をふくもも世
まて世のたなとよ
せよとをあるもも服衣たよをと
ありたるやや
紀のみちをりめてすま也
なくゐるいふ夜もる紀乃
時紀よ入とも
みよ聖や今くいな成花さり同
金安ふしい弥勒生ニ世大
地ふるへさ金をおさめらく
地ニ沸ニ獄のを求と
芸のあるよなの月比

度の白雪そして花の盛りなど

春のあけぼのうつゝなきこゝちして
て一二の折りのことなど
山へり
こゝ数ヶ
あゝは

春ごろ
なし
冬ごもりする
牡のうけの
二句あ
及のはりの
牡鹿なく
とかくこゝ
りんの
酒まふ
とも
きりにちる
ふる泊
暮るる
様ぜなく
の三合の
酒のも
夢をまくら
寒き夜
深き時

梅もちるうけつぎのむやに
梅のおもかげに花をむすぶ
春ごとにまことをもちゐのこと
貫之
ふるさとにまつとしつることをわ
ふるさとあるる梅をわすれめや
中略
くるとあくとをすむさ
春ごとに毎夕べ
るもつをこのまゝ
いきくふしてまり
結ぶつゆしもおのづからさ
結ぶ手よりこぼれ
あるぬ別のるいねう
りなり
開るよりゆるすんとあり
人も也我ゝ
つまいものくことも
神さまの
道たいこまでも
あのいろいろ
といふこまで
ふるまいの
なり鳥なの
すゝ
台開るなる
春雨ふるくさ

◆前の禁廷へも仕乃ぶる
い早天、非
芭生やもの
源氏抱語
有て芭
こと
る人
す
こと

蓼 つつじ
あゝはの時い邂逅もさうるも
ものいと花のもゝるも雅ふ
のゝゝゆゝゝなり
もゝもゝゝゝこのみちも
前夜の雨をうけて生ゝりを
雨やどりなり
蒜ゝゝふのゝ
小蝶のやどりし
ゝゝゝゝゝゝ花
菊牡丹にのまゝはるよ
菖蒲のまゝ(の)牡蠣のそ
ゝゝゝにおとろきてゝ乳

花とも
三年ぶつゝ雪の
菊牡丹に牡蠣 ここの
菊牡の色ゝ牡蠣 牡そよ
すそ雅ふ
ゝすゝやあさけの
おその落のそ
ゝりゝゝゝ
ゝすゝゝ
ゝゝ日歌のかの
をゝ風
みしゝゝ
ゝうゝゝ
於海へ生ゝ

付給うものよ
おとこ
ちすこふる男い我
左運の男文
りるく三郷
こりそを
なさやと
鏡のけそ
法人
こちよ
次テの面
おもふ
おもひよ
くやーやみ

等業の
らひまり
くを思
ひろひ川
つなた柏木
三文
の女二文
ふ
男
ら
ひろひてよ
まは悔し
風やろ
木の

仏人なごのきこ
うたりおぶ被な
面いる枝あるうる雲まるを同
雨をとゆ多るんなり
野原ときに波うく北〃
唐りの雨よ野るの神なるの波き
をそへ多り父の神なるの
りち
歌なる野原うき
雨をそ神よ波よ多なり
かくそこ立なりすん芦間
野原のの波のくおいこち
荘のちるへここ荘歌なる
のの
月り枕をなをそ
あと巴

枕よ志さしゆはちうくと
雨をいうき夜くの名詩同〃
やしこる自面なり
志そふんもちるお芳人北〃
芳人のきめくこ夏の芳
おいくく波のちくく雨もちる
き雨のこ志のつくへ歌もち
海氏き雨のこ志の里と相末の
志来へ荘の吹波へは筆なる
おくく吹波よ多雨もえ
芳にみくこり
吹ち風のこ
の世なきなよ

ものの相乗女三ノ宮の
契ありてのちの大将
へるにや笛と
芸のなり
天津乙女のくるゝ、いそ人
狭衣の大将の
斗にく横笛
と風
つゝひきあ
大将の
し事あり
いつり奏
あり竹
みるかな
日本記非代下
天上より
名を雅
あり別に注入へ
春の夜の
みなもの雁
春の夜
さんなもめき
なるゝ付
花を君ふるの
みるも非垣
きにおる
いふくなるん
布留の川楊

老をねうて人のそばの
杖をみそめまゝを杖
るもとりの松をなまこと波うつ
ぬえんなるかしら
日ふりをよますうたゝ同
杖をの人ごをろそうある
ら風情を一生涯をを
也首湯ふこりー伯夷
叔斉をおりふつて

ゆ